

〔研究ノート〕

小学校外国語活動・外国語科における音声指導

杉 本 孝 美

Takami Sugimoto

大阪総合保育大学
児童保育学部

小学校外国語活動・外国語科の授業を見ると、児童は楽しそうに歌やチャンツを口ずさんでいる光景を目にする。小学校外国語科が2020年に教科化され、それに伴い教科書を使った指導も始まっている。しかし、教科書で扱われている歌やチャンツを口ずさむ活動が音声指導になるのかという疑問を抱いた。英語の歌やチャンツには、英語特有のリズムや音律を肌で感じ、音を実際に口に出すことによって音素を認識し、識字レディネスにつなげることができる。

そこで、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の目標と内容を整理し、小学校外国語活動・外国語科における音声指導について考える。そして、7社から出版されている教科書で扱われている歌とチャンツについてまとめ、実際の授業での主な活用について検討する。

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の目標は、態度面に関することが強調されている。また内容においても、慣れ親しみ、気づきを促し、知識として理解することが大切であると記載されている。しかし、実際の授業では各自治体、学校、クラスによって異なるが、教科書で扱われている歌やチャンツをウォーミングアップとして取り入れている例が多く散見される。教員が歌やチャンツを何のために授業で扱っているかを認識し、音声指導についての知識を深める必要がある。教科書で扱われている歌やチャンツの活用を音声指導に活かす具体的な方法を考えていきたい。

キーワード：小学校外国語活動・外国語科・音声指導・歌・チャンツ

I. はじめに

小学校外国語活動・外国語科における音声指導とは、教員が音声学や音韻論を理解した上で、児童が日本語と外国語では音の出し方が違うことに気づき、日本語とは違う音を出してみようとする態度を育て、支援することであると筆者は理解している。

小学校では2011年から外国語活動が全面的に必修となり、前学習指導要領の中で「聞く・話す」を重点的に学ばせられていた。それを踏まえて、英語の歌やチャンツ(chant)¹⁾が多く取り入れられてきた。しかし、実際に多くの小学校で行われてきた授業において、英語の歌やチャンツを口ずさむことを音声指導としてきた経緯を否定できない。英語の歌やチャンツを授業に取り入れることには反対ではないが、単に口ずさむだけで音声指導としているところに疑問を抱いた。英語の歌やチャンツを取り入れることは、リズムや音律を聴くこと、さらに

音を実際に口に出すことによって音素の認識を伸ばすことができる。英語の歌に含まれている脚韻、頭音、尾音などを意識することによって、子どもの識字レディネスを整えることができる。児童が英語の音素を認識したり、英語の歌やチャンツを通して脚韻、頭音、尾音などを意識したりすることにつながる活動から始めなければならない。このことに注目し、小学校外国語活動・外国語科において、歌やチャンツを単に口ずさむだけではなく英語の歌やチャンツの活用ができるのではないかと考える。

そこで、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の目標及び内容と、現在使用されている参考図書及び外国語科の教科書に掲載されている歌やチャンツを整理する。そして、実際に実践されている小学校外国語科の授業内容を踏まえ、音声指導について検討していきたい。

II. 小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の目標及び内容の整理

1 外国語活動・外国語科の目標

第3学年及び第4学年対象の外国語活動の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え

大阪総合保育大学

〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26

takami-s@jonan.ac.jp

方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」と記されている。第5学年及び第6学年対象の外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。」と記されており、第3学年及び第4学年対象の外国語活動の目標と相違しているところは、コミュニケーションを図る素地と基礎という言葉のみである。

辞書（大辞林）によると、素地とは「生まれつきの性質や才能」と定義されている。しかし、おそらく学習指導要領においては、foundation（基盤）の要素を含む意味で使われているのではないかと想定する。また、基礎とは「①ある物事が成立する際に、基本となるもの②建築物の重量を支え、安定させるために設ける建物の最下位部の構造」などと定義されている。もちろん、学習指導要領においては、①の意味である。素地も基礎もそう簡単に築かれるものではなく、ましてや小学校外国語活動・外国語科だけで築かれるものでもない。しかし、本稿ではこの議論はこまめにしておき、外国語を通してコミュニケーションの素地や基礎となる資質・能力の育成を目指すことが目標であることを確認する。資質とは「人が生まれつき備えている性質や才能のこと」、能力とは「環境や教育などによって、人の中に形成される物事を成し遂げる性質のこと」と定義されており、この議論も本稿ではしないが、性質を育成することを深く考えて授業を組み立てているのかという視点を持って授業をみることは面白い。小学校教育は全人教育（人を育てる）とされていることを共通理解として使用される文言なのであろう。つまり、外国語活動・外国語科でも人を育てることを大きな目標としているということである。

「次」という部分に記される具体的な目標として、第3学年及び第4学年対象の外国語活動では、（1）外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気づくとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。（2）身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。（3）外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを測ろうとする態度を養う。と記載されている。

第5学年及び第6学年対象の外国語科では、（1）「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きな

どについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技術を身につけるようにする。（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。と記載されている。

外国語活動では、日本語と外国語との音声の違いに気づき、慣れ親しむところから、外国語科では、その気づきから基礎的な技術を身につけるとされ、その技術を活かして自分の考えや気持ちを伝え合う力をつけ、その力を主体的に発揮する態度を養うことが目標とされている。

さらに、「英語」に特化して詳細に目標が記載してある。第3学年及び第4学年対象の外国語活動では、「聞くこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」の3領域中の「聞くこと」では、簡単な語句を聞き取り、意味を理解し、その語句の文字が分かるようにする。「話すこと」では、基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりする。また簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合ったり、質問しあったりし、具体的なものを用いながら発表することを目標にしている。第5学年及び第6学年対象の外国語科では、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5領域中の「聞くこと」では、基本的な表現を理解し、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。「読むこと」では、文字の識別と発音をすることができ、意味も分かるようにする。「話すこと」では、基本的な表現を用いて自分の考えや気持ちに加え、相手のこと及び身の回りのものに関する事柄について伝えたり、発表したりできるようにする。「書くこと」では、大文字、小文字が書けて、十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写したり、例文を参考に語順を意識して書いたりできるようにする。

このように、一見順を追って目標が達成できるように設定されているが、実際には順を追って目標が達成できる課題ではない。人間は意志伝達のために主に音声言語と文字言語を用いている。窪蘭（2005）が「文字を持た

ない言語は存在するが、音声のない言語は存在しない」と述べたように言語を学ぶ上で音声はいかに重要であるかがわかる。それゆえに、小学校外国語活動が全面的に必修化された2011年から約10年間は、小学校では「聞く・話す」を重点的に学ぶとされており、現行の3学年及び第4学年対象の外国語活動においても「聞く・話す」の領域の指導となっている。しかし、2020年に外国語科が設置されてからは、音声の違いに気づくことに留められ、丁寧な音声指導が軽視されているのではないかと懸念する。丁寧な音声指導を飛ばして、ことばを発することを急いでいるように感じ、また、そのように進めて良いように解釈できてしまう。言語の音の出し方を学び、ことばの意味を考えることで、母語以外の言語も母語と同じように大切であることを理解し、ことばを紡ぐことができるようになるのではないかと考える。

2 外国語活動・外国語科の内容

第3学年及び第4学年が対象となる外国語活動の内容は、児童は実際に英語を用いた言語活動を通して、日本と外国の言語や文化について体験的に理解すると述べられている。英語の音声やリズムなどに慣れ親しむと共に、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさを感じることが大切だとされている。多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることを目標としているわけではない。一方、音声面に関しては、児童の柔軟な適応力を十分生かすことが可能であることを踏まえて、外国語活動では、児童が英語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、気づきを促すことが大切である。例えば、日本語のミルク(mi-ru-ku)は3音節であるが、英語のmilkは1音節である。これを日本語のようなリズムで発音すると、英語に聞こえず、意味も伝わらない。そこで、実際に英語の歌やチャンツを通して、英語特有のリズムやイントネーションを知ることで、児童が日本語と英語との音声面の違いに気づくことになる。さらに、文字が音声化されるのを聞いて、活字体で書かれた文字と音が結び付

ていることに気づく活動をすることにより、児童は体験的に文字に親しむことができる。児童の発達段階を考慮し、一時に多くの文字と音を一致させることを求めたり、知識として指導したりするのではない。文字の形を指で作ってみたり、形に着目して仲間分けをしたりするなど、児童が文字に親しみ、興味・関心が高まるような工夫をしながら、多様な活動へと広げていくことが望まれる。

第5学年及び第6学年対象の外国語科の内容は、児童は実際に英語を用いた言語活動を通して、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる能力を身につけると述べられている。第3学年及び第4学年対象の外国語活動に対して、技術的な向上を目指した内容になっている。日本語の発音にはない母音や子音があることや日本語と英語の音声の特徴の違いに気づき発音をする。特徴の違いである語と語の連結による音の変化、語や句、文における基本的な強勢、イントネーション、区切りなどを意識できるようにする。英語の文字の読み方には名称と音があることを知り、文字と音の組み合わせで単語を作る。終止符や疑問符、コンマなどの基本的な符号等を含め文の構造を意識できるようにする。

このような内容において、第3学年及び第4学年対象の外国語活動では慣れ親しむこと、第5学年及び第6学年対象の外国語科では、個々の発音や音声から文字を識別したり文構造を理解したりすることに重点が置かれている。

Ⅲ. 小学校外国語活動・外国語科で扱われている歌とチャンツ

1 小学校外国語活動で扱われている歌とチャンツ

外国語活動で使用している参考図書であるLet's Try! 1(3年生対象)とLet's Try! 2(4年生対象)で扱われている歌とチャンツ(【表1】参照)は、Let's Try! 1の中に歌が5曲、チャンツが3つ、Let's Try! 2

【表1】Let's Try! 1 / Let's Try! 2 掲載の歌・チャンツ

出版社名	Let's Try! 1 (3年生対象) 歌 (S)・チャンツ (C)	Let's Try! 2 (4年生対象) 歌 (S)・チャンツ (C)
東京書籍	Hello! (C) Hello Song (S) Goodbye Song (S) Ten Step (S) How many? (C) I like blue. (C) The Rainbow Song (S) ABC Song (S)	How's the weather? (C) What day is it? (C) What time is it? (C) Do you have a pen? (C) ABC Song (S) Alphabet Chant (C) What do you want? (C) School Chant (C)

の中に歌が1曲、チャンツが7つある。歌は、“Hello Song”、“Goodbye Song”、“Ten Step”、“The Rainbow Song”、“ABC Song”(Let’s Try! 1、2 共通)で、それぞれ、あいさつ、数、ABCを題材にしたものである。チャンツは、単元の基本的な定型文をインプットし、リズムに乗せて発声できるように取り入れられている。

2 外国語科で扱われている歌とチャンツ

外国語科の教科書7社で扱われている歌とチャンツ(【表2】参照)は、各教科書ごとに異なっており、各単元に歌を掲載している教科書もあれば、全く歌を掲載していない教科書もある。

東京書籍のNew Horizon Elementary 5(5年生対象)、New Horizon Elementary 6(6年生対象)では、歌は各単元のテーマソング的な位置づけとして、チャンツは各単元の基本的な定型文をインプットし、リズムに乗せて発声できるように取り入れられている。これらの歌を歌えるようになることで、キーフレーズをスムーズに言えるようになることを目的としていると考えられる。さらに、単元以外に“This is my town”、“Take Me Home, Country Roads”、“We Are the World”が掲載されている。“This is my town”は、歌詞を替えてオリジナルソングをつくり、町紹介を英語でできるようにすることを目的にしている。“Take Me Home, Country Roads”と“We are the World”については、おすすめの英語の歌として掲載されており、特に単元とのつながりを意識しているわけではなさそうである。尚、Let’s Try! 1、Let’s Try! 2、New Horizon Elementary 5、New Horizon Elementary 6はいずれも東京書籍から出版されており、歌やチャンツを選ぶ基準が共通しているのかもしれない。

学校図書 of the Junior Total 1(5年生対象)、Junior Total 2(6年生対象)では、マザーグース²⁾から歌を選んでいる。マザーグースの歌を歌うことで、英語のプロソディ(prosody)³⁾を育むことを目的としていると考えられる。しかし、単元とのつながりは特に見受けられない。チャンツは、各単元で扱われている単語や定型表現をリズムに乗せて聞き取り、発声できるように、Let’s listen / Let’s chantの教材として扱われている。

開隆堂のJunior Sunshine 5(5年生対象)では、扱われている歌を歌うことで、毎回の授業で挨拶、日付、曜日を言えるようになることを目的としていると考えられる。Junior Sunshine 6(6年生対象)で扱われている“Twinkle, Twinkle Little Star”は、単元のテーマが七夕で、それに因んだものと考えられる。しかし、もともとは、18世紀にフランスで流行した“Ahl Vous

dirais-je, Maman”(あのね、ママ聞いてよ)というジャンソンのメロディーに、イギリスの詩人であるジェーン・テイラーの英詩の替え歌をあてたものである。それが、今ではマザーグースの中に収録されており、手遊び歌として親しまれている。七夕に歌う歌であるかという点は検討の余地が残されている。チャンツは、Junior Sunshine 5、Junior Sunshine 6ともに単語や定型表現をリズムに乗せて発声することを促すものになっている。チャンツのタイトルが、教科チャンツや国名チャンツなどのものは単語を、定型表現をリズムに乗せた形態のものは定型表現をインプットしたり発声を促したりする目的で扱われている。さらに、「夏休みの思い出チャンツ」、「20年後の同窓会チャンツ」なども扱われており、オリジナリティを出している。

三省堂のCrown Jr. 5では、歌は取り扱われておらず、各単元2種類のチャンツが扱われている。2種類のチャンツはそれぞれ、Sound ChantとWord Chantに分けてある。Sound Chantはアルファベットの1文字1音の音、語頭や語尾の音を意識できる単語を見ながらリズムに乗せて発声することにより、フォネミックアウェアネス(phonemic awareness)⁴⁾を育むことを目的としている。また、Crown Jr. 6では、Sound Chantで反対語、連続子音(consonant blend)⁵⁾が入っている単語、イディオム(idiom)⁶⁾をリズムに乗せて発声することを目的としている。Word ChantはCrown Jr. 5、6とも単元で扱われている単語をリズムに乗せて発声することを目的としている。

光村図書のHere We Go! 5、6では、歌をマザーグースから選んでいるものとポピュラーなものが混在して扱われており、単元につなげて、1日の生活を思い浮かべながら歌うことを目的にしているものや、特に単元とのつながりはないが、くり返しの言葉の響きや調子を楽しみながら歌うもの、平和を祈りながら歌うもの、似た音のくり返しを楽しみながら歌うもの、単に楽しみながら歌うもの、「一人一人はかけがえのない存在で、あなたの代わりはだれもないよ」というメッセージを受け取りながら歌うものとそれぞれに歌う目的を定めて扱われている。

啓林館のBlue Sky 5では、歌は“ABC Song”、“Twelve Months of the Year”、“The Seven of the Day”の3曲が扱われており、英語で扱われるアルファベットに親しむことと、日付を理解することが目的になっていると考えられる。Blue Sky 6には歌は取り扱われておらず、Blue Sky 5ではPre Unitで2つのチャンツ、Unit 1～8の各単元内に3つずつチャンツを扱われており、Blue Sky 6では、Pre Unitにはチャンツの扱いはなく、

【表2】小学校外国語科の教科書掲載の歌・チャンツ

出版社名	教科書名（5年生対象） 歌（S）・チャンツ（C）	教科書名（6年生対象） 歌（S）・チャンツ（C）
東京書籍	New Horizon Elementary 5 Nice to meet you. (S) How do you spell your name? (C) What sport do you like? (C) Happy Birthday! (S) When is your birthday? (C) What do you want? (C) What do you have on Mondays? (S) What do you want to study? (C) What do you want to be? (C) This is my town. (S) Who is this? (C) I can swim. (C) Can you swim fast? (C) She can sing well. (C) Excuse me. (S) Go straight. (C) Turn right. (C) What would you like? (S) I'd like a hamburger. (C) How much is it? (C) Yokoso! (S) Why do you like winter? (C) What do you do on New Year's Day? (C) My hero (S) Who is your hero? (C) Why is he your hero? (C)	New Horizon Elementary 6 Hello, everyone. (S) Where are you from? (C) My Day (S) Where do you live? (C) I want to go to Italy. (S) Where do you want to go? (C) We love summer vacation. (S) Did you enjoy camping? (C) We all live together. (S) Sea turtles, sea turtles, where do you live? (C) What did you eat? (S) Are you hungry? (C) Four Seasons (S) What is your best memory? (C) My Future Dream (S) What do you want to do in junior high school? (C) This is my town. (S) Take Me Home, Country Roads (S) We Are the World (S)
学校図書	Junior Total 1 Word Chant (Lesson 1 ~ 10) (C) The bear went over the mountain (S) Rain, rain, go away (S) Pat-a -cake (S) A sailor went to sea (S) Pease porridge hot (S) Eentsy, weentsy spider (S) One, Two, Three Four, Five (S) One elephant went out to play (S) This little pig went to market (S) Old MacDonald had a farm (S)	Junior Total 2 Word Chant (Lesson 1 ~ 10) (C) I love the mountains (S) If you're happy (S) London Bridge (S) Row, Row, Row your boat (S) Mary had a little lamb (S) Down by the bay (S) The farmer in the dell (S) Once an Austrian went Yodeling (S) This old man (S) She'll be comin' round the mountain (S)
開隆堂	Junior Sunshine 5 Hello Song (S) ABC Song (S) Twelve Months (S) Days of the Week (S) Twenty Steps (S) Hundred Song (S) Word Chant (C) Where is your treasure? (C) What would you like? (C) It's famous for (C)	Junior Sunshine 6 Twinkle, Twinkle Little Star (S) Word Chant (C) Where do you want to go? (C) Welcome to Japan (C)

出版社名	教科書名（５年生対象） 歌（Ｓ）・チャンツ（Ｃ）	教科書名（６年生対象） 歌（Ｓ）・チャンツ（Ｃ）
三省堂	Crown Jr. 5 Sound Chant（Lesson 1～7）（Ｃ） Word Chant（Lesson 1～7）（Ｃ）	Crown Jr. 6 Sound Chant（Lesson 1～7）（Ｃ） Word Chant（Lesson 1～7）（Ｃ）
光村図書	Here We Go! 5 This is the way（Ｓ） I love the mountains（Ｓ） It's a small world（Ｓ） Pease Porridge Hot（Ｓ） On Top of Spaghetti（Ｓ） Everyone is Special（Ｓ） How do you spell it?（Ｃ） I like red.（Ｃ） When is your birthday?（Ｃ） I want a pink pencil case.（Ｃ） What subject do you like?（Ｃ） I have math, music, and English.（Ｃ） I always do my homework.（Ｃ） What time do you get up?（Ｃ） Can you ride a bicycle?（Ｃ） He can play baseball.（Ｃ） You can visit Rome.（Ｃ） Where do you want to go?（Ｃ） I'd like French fries.（Ｃ） How much is it?（Ｃ） Where is my cup?（Ｃ） Where is the station?（Ｃ） She is a singer.（Ｃ） He is smart.（Ｃ）	Here We Go! 6 How do you do?（Ｓ） Do-Re-Mi（Ｓ） Take Me Out to the Ball Game（Ｓ） A Sailor Went to Sea（Ｓ） Humpty Dumpty（Ｓ） Sing（Ｓ） Bring Happiness to the World（Ｓ） Over the Rainbow（Ｓ） I Think You're Wonderful（Ｓ） I'm from the U.S.（Ｃ） I'm good at running.（Ｃ） In spring, we have Children's Day.（Ｃ） You can see the parade.（Ｃ） Do you want to watch wrestling?（Ｃ） I want to watch rugby.（Ｃ） I went to the mountains.（Ｃ） It was great.（Ｃ） I want new shoes.（Ｃ） She is kind and gentle.（Ｃ） We don't have an aquarium.（Ｃ） We can enjoy fishing.（Ｃ） My best memory is our school trip.（Ｃ） What do you want to be?（Ｃ） I want to be a zookeeper.（Ｃ） I want to join the science club.（Ｃ）
啓林館	Blue Sky 5 ABC Song（Ｓ） Twelve Months of the Year（Ｓ） The Seven Days of the Week（Ｓ） Chant（Unit1～8）（Ｃ）	Blue Sky 6 Chant（Unit1～8）（Ｃ）
教育出版	One World Smiles 5 ABC Song（Ｓ） Twelve Months of the Year（Ｓ） The Seven Days of the Week（Ｓ） Get up! Song（Ｓ） Who can ski?（Ｓ） It's a Small World（Ｓ） What color do you like?（Ｃ） When is your birthday?（Ｃ） I have math on Tuesday.（Ｃ） I can play the recorder.（Ｃ） I can cook.（Ｃ） He can swim well. She can jump high.（Ｃ） Where do you want to go?（Ｃ） What would you like?（Ｃ） Where is the station?（Ｃ） Who is your dream friend?（Ｃ）	One World Smiles 6 Smile（Ｓ） What do you like?（Ｃ） Welcome to my town.（Ｃ） What do you like about Japan?（Ｃ） What did you do?（Ｃ） What country do you want to visit?（Ｃ） What sport do you want to try?（Ｃ） What's your best memory?（Ｃ） What do you want to be?（Ｃ） What club do you want to join?（Ｃ）

Unit 1～8の各单元内に2～3つのチャンツが扱われている。いずれも定型表現を聞き、発声することを目的としている。

教育出版のOne World Smiles 5では、啓林館のBlue Sky 5と同じく“ABC Song”、“Twelve Months of the Year”、“The Seven of the Days”の3曲が扱われており、アルファベットに親しむことと、日付を理解することが目的になっていると考えられる。さらに、1日のルーティンを歌にした“Get Up! Song”とcanを使った表現を歌にした“Who can ski?”の2曲が加えられている。この2曲はチャンツに極めて近いものである。One World Smiles 6では、“Smile”の1曲のみ歌が扱われており、チャールズ・チャップリンの映画『モダン・タイムズ』で使われた後、時代をこえて歌いつがれていると注釈があり、「ほほえんでいるかぎり、明るい明日がきっと来る」と元気づけてくれるメッセージを受け取りながら歌うことを目的としている。One World Smiles 5、6ともに、チャンツという言葉を用いず、Let's say it togetherとしてリズムに乗せて各单元の定型表現を発声する活動を取り入れられるようにしている。

Ⅳ. 歌やチャンツを活用した小学校外国語活動・外国語科の授業

1 歌やチャンツの扱い

小学校外国語活動・外国語科で扱っている言語は、実際英語である。従って、以下英語の授業と述べる。

英語の授業で歌が扱われることは、1930年代の文献より戦前から存在していることがわかるが、多くは課外や補習の場または女学校や師範学校において英語唱歌、童謡、民謡などを扱っており、音声指導の位置づけではなかった。江利川（1993）は、「東京高等師範学校附属小学校教授細目」（明治40年）をみる限り、明治末期には訳読法を完全に脱し、耳と口を重視した直接教授法的な新しい教授法が小学校英語科教育の教授方針として前面に出てきたことにより、耳および口の指導が重視され、入門期の指導法としては必須で今日でもそのまま通ずる水準であると述べている。また、アレン玉井（2010）は著書の中で、歌やチャンツは英語の流れを全体的に学習し、リズムやイントネーションを体得することができると述べている。また、トップダウン方式で英語という言葉を感じ、英語を学習するために必要なリズムやイントネーションを身に付けるために歌やチャンツを活用するということであると述べている。

小学校英語の授業で歌やチャンツが活用されているこ

とに関する論文はあるが、音声指導の明確な位置づけ等に関して述べられているものはほとんどなく、入門期には歌やチャンツを取り入れることのみが共通認識されてきたようである。

2 実際の授業

ある小学校（大阪府内C小学校）の外国語活動・外国語科の実際の授業において、歌やチャンツは、授業開始時5分くらいのウォーミングアップに活用されている。例えば、New Horizon Elementary 5のUnit 4 “He can bake bread well”を取り上げてみる。

単元目標は「身近な人を紹介しよう」となっており、この単元で扱う歌として“This is my town”があり、児童はウォーミングアップで歌う。第1時間目では、ウォーミングアップで“This is my town”を口ずさんだ後、フラッシュカードを用いて、場所や人を表す単語を導入し、チャンツを使って繰り返し発声する。そして、聞き取りとして英語を聞いて場所や人を表す単語とマッチングさせる作業を行う。第2時間目もウォーミングアップで“This is my town”を口ずさむ。次に、自分たちの身近な人のできること・できないことを紹介し合うために、聞き取りとして教科書に登場するMarkとYunaのできることに○、できないことに×をつける作業を行う。そして、クラスメイトにできるかできないかのインタビュー活動をする。第3時間目もウォーミングアップで“This is my town”を流し、紹介カードを作る。第4時間目もウォーミングアップで“This is my town”を流し、身近な人のできること・できないことの発表をする。以上のような流れで授業が行われており、ほとんどの授業で1つの単元は4時間で構成されており、どの時間にもウォーミングアップとして歌を歌う。そして教科書に掲載されていることに忠実に順を追って作業を行い、インタビュー活動をコミュニケーション活動として行い、発表原稿を書き写し、暗記して発表するという流れが多く行われている。但し、この授業の流れは、自治体、学校、さらには学級ごとに異なる。

Ⅴ. 小学校外国語活動・外国語科における音声指導の考察と課題

1 考察

小学校学習指導要領外国語活動・外国語編の目標及び内容において音声指導については、曖昧性が強く、教員が認識しにくいことがわかった。そのため、音声が重要だと認識していても、教科書に掲載されている英語の歌

やチャンツをウォーミングアップとして口ずさむ程度に留められている。今日の英語の授業における音声指導の位置づけは明確になっていないまま、教科書で扱われているのでウォーミングアップとして活動に取り入れるくらの認識になっているのかもしれない。ウォーミングアップとして取り入れることには賛成であるが、取り入れ方を考える必要がある。よく児童は、「聞こえたまま発音すればよい」と言われているので、聞こえたまま歌っていると言っている。しかし、それでは授業における指導とは言えないのではないだろうか。普段使わない母語にはない音への気づきと、その音の出し方を知り、実際に音を出してみることで「聞こえたまま発音」ができるようになると考える。発音の仕方を指導することなしに「聞こえたまま」英語の歌を歌うことは児童にとってはかなり困難である。一般的に児童期は成人よりも耳はよいと言われているが、そのことに頼り授業を行うことに疑問を抱く。発音の仕方の違いを知り、その音を出すことにより気づきを促すことも児童の学びにつながるものと考ええる。また、英語の歌やチャンツを授業に取り入れている経緯は、2002年に実施された総合的な学習の時間で扱われた英語の一環として英語の歌やチャンツを取り入れていたことからの継続であることも考えられる。しかし、入門期の指導法として耳および口の形の指導をすることを飛ばして、歌やチャンツを口ずさむことを音声指導としている実態があるのではないだろうか。口ずさむだけでは、児童は歌をしっかりと歌うことができないだけでなく、気づきを生むこともできない。児童は歌を歌う目的がわからないまま、歌が流れる時間を過ごすことになっている。

実際の授業では、児童はウォーミングアップで音楽が流れるとなんとなく歌っているが、学習との結びつきを感じることができていると思えない。歌やチャンツを通して、その時にどのように聞こえているかを尋ねたり、発音の仕方を指導したりすることで、児童の音に対する意識が変わるのではないかと考える。きちんと歌っている児童が見受けられないことが残念である。さらに、音楽が流れている間に教科書を出すなどの授業準備をしていることも多く見られる。Ⅳで述べた授業の流れの中で1時間目と2時間目は歌を「口ずさむ」と表現し、3時間目と4時間目は「流す」と表現した理由は、1時間目と2時間目には、音楽に合わせて歌おうとする態度が見受けられるが、きちんと歌えないことからモチベーションが下がり、3時間目と4時間目には曲は流れているが、BGMとなり他のことをしている児童が多く見受けられたからである。この状況から、歌の位置づけが「今から英語の時間が始まる」という合図になっているにす

ぎないのではいかと考えられる。このような授業の始まり方では、教科書に歌が掲載されている意味がなくなってしまう。入門期の音声指導として、耳および口の指導をしっかりと行った上で、英語の歌を歌えることがウォーミングアップとして耳や口を慣らし、そこでの気づきが次の学びにつながるように授業を組み立てる必要があると考える。

また、文部科学省(2004)のアンケート結果や「小学校英語教育に関する調査研究報告書」の概要(2015-16)から、歌やチャンツを活用している小学校の英語の授業のほとんどは、ウォーミングアップに活用されており、児童も楽しそうにしているからという理由の活用であることがわかる。せっかく歌やチャンツを取り入れているにもかかわらず、児童のほとんどは歌の歌詞を覚えていることはなく、チャンツにおいてはリズムに乗っているに過ぎない場面が多く見受けられる。その場面だけを見れば、児童は非常に楽しんでいる様子であると受け取ることができる。そして、児童のモチベーションを高める一定の効果は認められている。しかし、後々の英語学習への意欲や学習効果につながっているわけではないこともわかる。児童のモチベーションを高める一定の効果は無駄にすることなく、ウォーミングアップで活用した歌やチャンツを音声指導に活かす手立てを考えなければならない。

2 課題

小学校教員は、児童が日本語と外国語では音の出し方が違うことに気づき、日本語とは違う音を出してみようとする態度を育て、支援できるための基礎的な知識を身につけることが重要である。音声指導をするために音声学や音韻論についての基礎的な知識を教員養成課程をもつ大学等で学ぶ必要がある。近年の教員養成課程においては、それを学べる科目が設置されているはずである。音声学とは、日本音響学会の言葉を借りると、「言語音がどのようにして作られ、伝わり、分かるか」を調べることである。また、音韻論とは、同じく「言語音がどのようにに並べられ、入れ替わり、意味を区別するか」を調べることである。つまり、言語の音を作るために、口の形がどのようにになっているのか、舌の位置や動きがどのようにになっているのかを知り、実践してみることが必要である。近年では、フォニックス(phonics)⁷⁾を取り入れているところも少なくない。音声学や音韻論またはフォニックスを学ぶことによって、英語の歌を歌う時に、どのように音を運んでいくのかが理解できる。口の形や舌がどのように動いているかを知ること、英語の歌の中や表現の中で、リエゾン(liaison)⁸⁾またはリン

キング (linking) したり、リダクション (reduction)⁹⁾ したり、フラッピング (flapping)¹⁰⁾ したりすることも理解できる。このような基礎的な知識を身につけた上で、音声指導を行なわれているかが課題である。児童の生活や授業における文脈も何もないところに、突然英語の文字と音の関係の場面が出てくるようなフォニックスの指導や上記の英語特有の法則を口頭で説明するような指導は小学生の学びにはふさわしいかどうかを検討しなければならない。また、小学校外国語活動・外国語科の授業において、児童のモチベーション向上のためのウォーミングアップとして英語の歌やチャンツを取り入れているだけでは、音声指導にはならない。そのことを踏まえて、音声指導のあり方を考えることが課題である。

VI. おわりに

小学校外国語活動・外国語科における音声指導は、文字と音の関係を体験的に学び、中学校以降の学びへとスムーズに移行できることが必要である。文字と音の関係だけを取り上げて学ぶのでも、歌やチャンツを口ずさむだけでもない音声指導をすることが望まれる。学習指導要領解説にも何度も記載されているように、児童が外国語と日本語の音の違いに気づき、その気づきから学びが深まっていく授業展開をする必要がある。小学校外国語活動・外国語科における音声指導は、歌やチャンツを活用して、入門期の耳や口の形の指導をすることであると考える。母語にない音や母語とは違う音を聞き分け、実際に口の形や舌がどのように動いているかを具体的に知ること、どのように音を運んでいくのかを理解し、実際に音を出す練習として歌やチャンツを活用することが体験的な学びになると考える。

英語の音を聞いて、児童がどう感じるのか、それはなぜなのかと児童と一緒に考えるとヒントがあるのではないだろうか。児童は、英語の音を聞いて、聞きなれない音に面白さを感じて笑う場面もあれば、普段カタカナで使っている日本語のことばは実は英語だったのか、などと様々な気づきをしている。そして、英語の歌を歌うことで、児童が気づいたことを取り上げて、音のつながりを理解したり、英語特有の音の発声の仕方を意識したりすることができるのではないだろうか。これらの気づきや理解したことが学びとなり、実際に表現してみたいという気持ちを育て、児童自身が場面を想定してコミュニケーションを楽しむことにつながるのではないだろうか。そして、外国語も母語と同じように尊い存在であることを実感し、ことばに対する認識をしっかりと持つこと

ができるのではないだろうか。今後、英語の歌やチャンツを活用して音声指導につながる具体的な授業展開を考えていきたい。

注

- 1) チャンツ (chant) は単語を並べるだけで成立する一定のリズムがあるものでメロディや韻はない。キャロリン・グラハム氏が考案した Jazz Chants for Children (1979) がきっかけで児童英語の学習法として広まったとされている。
- 2) マザーグースは、イギリスで古くから口承によって伝承されてきた子守唄、手遊び歌、早口言葉、ナンセンス歌、物語歌などの総称である。
- 3) プロソディ (prosody) は、言語学における韻律で、自然な英語の発話の中におけるリズム (緩急・間・テンポ)、ストレス (強弱・強勢・アクセント)、イントネーション (高低・抑揚) のことである。
- 4) フォネミックアウェアネス (phonemic awareness) は、音素認識の基本であり、単語の中に含まれる音素という最小単位の音を認識することである。その音の単位を認識することで、単語が構成されている言葉の一つ一つの音を聴き分けることができるようになる。
- 5) 連続子音 (consonant blend) は、2つまたは3つの子音字が連続した時に、それぞれがもとの音を残しながら混ざり合った1音になること。
- 6) イディオム (idiom) は、二、三の語が結びついて、原義とは幾分違った特殊な意味を持つ、習慣的な言いまわしのこと。慣用語、成句とも称される。
- 7) フォニックス (phonics) は、アルファベット文字と音の関係を知ること。英語において、綴り字と発音との間に規則性があり、正しい読み方の学習を容易にさせる方法の一つである。ある発音がどの文字群と結び付いているかを学び、それらの文字の発音を組み合わせて知らない単語の正しい発音を組み立てる方法を学ぶことができる。
- 8) リエゾン (liaison) は、フランス語で音がつながることを意味する。英語ではリンキング (linking) と称され、舌の動き上、発音された音がつながってしまうことを言う。
- 9) リダクション (reduction) は、英語の舌の動き上、音が脱落したり、曖昧になったりすることを言う。
- 10) フラッピング (flapping) は、パタパタと動く flap を意味し、舌をパタパタ動かして発音することにより本来の音が変化することを言う。

文献

- アレン玉井 (2010). 「小学校英語の教育法－理論と実践－」 大修館書店.
- 江利川春雄 (1993). 「小学校における英語科教育の歴史 (4) －明治後半期におけるその諸相－」 日本英語教育史研究第8号.
- 窪蘭晴夫 (2005). 音声学・音韻論 くろしお出版.
- 瀧口優 (2020). 英語教育における歌の意義と課題 白梅学園大学・白梅学園短期大学 子ども学研究所研究年報 No.25.

- 29-37.
石原知英・日高佑郁・高味淳・濱崎孔一廊・金崎英俊 (2021).
「小学校英語における音声の指導：モデルの復唱で身に付くことと身に付かないこと」 鹿児島大学教育学部研究紀要第72巻. 教育学科編.
「小学校英語教育に関する調査研究報告書」の概要 (2015-16)
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-4-1-s.pdf (2022 年 11 月 1 日).
日本音響学会
<https://acoustics.jp/> (2022 年 11 月 1 日).
- 文部科学省 (2004)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379978.htm (2022 年 11 月 1 日).
文部科学省 (2008). 小学校外国語活動研修ガイドブック 旺文社.
文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領 東京書籍.
文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編 開隆堂.

Speech Instruction in Foreign Language Activities and Foreign Language Studies in Elementary Schools

Takami Sugimoto

Osaka University of Comprehensive Children Education

In elementary school foreign language classes, students are seen happily humming songs and chants. Foreign language studies in elementary schools will be installed a subject in 2020, and accordingly, instruction using textbooks has begun. However, I wondered if the activities of humming the songs and chants covered in the textbooks would be considered voice instruction. English songs and chants allow students to experience firsthand the unique rhythm and rhythm of the English language and to recognize phonemes by actually saying the English sounds out loud, which can lead to literacy readiness.

Therefore, we will organize the goals and contents of the Foreign Language Activities and Foreign Language Studies in Elementary Schools, and consider speech instruction in elementary school foreign language activities and foreign language studies. Then, we will summarize the songs and chants covered in textbooks published by seven different publishers, and consider their main applications in actual classes.

The objectives of the Foreign Language Activities and Foreign Language Studies in Elementary Schools let students emphasize attitudinal aspects. In terms of content, it also states that it is important to familiarize oneself with the language, promote awareness, and understand the language as knowledge. However, in actual classes, although it varies from school to school etc., there are many cases where songs and chants covered in textbooks are used as a warm-up. Teachers need to be aware of what songs and chants are used for in class and deepen their knowledge of speech instruction. We would like to consider specific ways to utilize songs and chants in textbooks for voice instruction.

Key words : foreign language activities in elementary schools, foreign language studies in elementary schools, speech instruction, songs and chants